

## アントニウス会サンタントワーヌ修道院附属聖母聖堂聖三位一体脇礼拝堂の考察

茅根 紀子（実践女子大学）

フランス・ドーフィノワ地方にあるアントニウス会サンタントワーヌ修道院附属聖母聖堂聖三位一体脇礼拝堂は、会内で権勢を誇っていたアントニウス会財務管理人のジャン・ドゥ・モンシェニュによって、1443年に一族の礼拝堂として寄進されたことが分かっている。年代記は本礼拝堂について「贅沢で壮麗」と伝えるが、宗教戦争の際に内部が破壊され、現在は、東壁面に彫刻《聖三位一体》の一部と、南壁面の丸窓の設けられた壁龕リュネット部に壁画《港町》が残されるのみである。宗教的モチーフの見当たらない純粋風景画様の壁画《港町》は、風景画の歴史を考える上で興味深い作例だが、1902年にディジョンが聖母聖堂の建築史の記述において触れている他は、先行研究で殆ど考察されていない。本発表では、寄進文書や教会史も確認しながら、礼拝堂が建てられた経緯や壁画《港町》の主題解釈、制作者の問題について包括的に考察する。

本礼拝堂は他の脇礼拝堂に比べて狭く、鐘楼の柱に大きく遮られているため、特異な内部空間を有している。これは、聖堂外部へと通じる通路の踊り場を脇礼拝堂として利用したためと考えられる。同寄進者による死者周年記念寄進文書は、モンシェニュが聖三位一体礼拝堂近くに家を所有していたことを伝えている。南壁外側に壁龕を埋めた跡が認められることから、彼の家と聖堂を直接つなぐ通路が設けられていた可能性が高い。モンシェニュは、狭い内部空間であるにもかかわらず、聖アントニウスの聖遺物が間近にある特別なこの場所に、一族の脇礼拝堂を建設したかったのではないだろうか。

また、鳥瞰図で描かれた《港町》には宗教的モチーフが描かれておらず、一見純粋風景画様に見える。ラクロットも指摘するように類例の無い孤立した作例だが、先行する墓標彫刻の作例から、かつて壁龕には寄進者の横臥像が納められ、寄進者の肖像彫刻の背景として《港町》が描かれたと考えられる。しかし、壁龕式墓標の背景として風景画が描かれた作例は他に無く、中央に丸窓が開けられている点も特異である。《港町》は、比較作例が無いものの、生前成就しなかった巡礼を死後に代理人によって行う「死後の巡礼」の風習にならって、「エジプト巡礼」を描いたものではないだろうか。折しも、寄進者につながる人物にエジプトのアントニウス修道院へ巡礼した者がいた。また、エジプトのアントニウス修道院院長がコプト教会代表としてフィレンツェ公会議に参加していたことも、寄進者のエジプト巡礼への憧憬を掻き立てたに違いない。壁画制作者については、絵画様式から寄進者と縁の深いサヴォワ派、もしくはネーデルラント派と考えられる。一方壁龕に納められていた墓標彫刻は、ジャン無怖公の墓標を制作したアントワーヌ・ル・モワトゥリエールによって寄進者の死後に制作された可能性があり、壮麗と伝えられる本礼拝堂にふさわしい作品であったことだろう。